

地域移行型ホームさやか 地域連携推進会議 議事録

日時:令和7年 11 月 17 日(月) 17:00~18:00

場所: 社会福祉法人清心会 法人本部棟 多目的室

参加者:理事長、副理事長、常務理事、グループホーム施設長、副施設長
障害者支援施設さやか施設長、副施設長、
利用者 C 様、利用者家族 T 様、地域の関係者 M 様
福祉に知見のある方 I 様、経営に知見のある方 K 様

1 開会 17:00

2 趣旨説明

理事長:地域連携推進会議は今年から義務化され、今回は地域移行型ホームさやかを行います。国の趣旨として、福祉の分野に営利法人が参入して不適切な施設が多くなってきており、風通しをよくして、たくさんの意見を聞きながら健全な経営をしていくために会議を下さいということである。当法人は地域と人とのつながりを大切にしていると思っているが、それでも皆さんに見ていただく機会がないので、制度のことも含めていろいろと質問をしていただければと考えています。ご協力をお願い致します。

3 出席者自己紹介

4 グループホームの紹介

副理事長:今回は地域移行型ホームですが、今までも地域移行型ホームを作る際には、地域移行推進協議会を作りなさいということで、評議員会では地域移行型ホームの利用状況等を定期的に報告してきた。この会議が義務化されたので、生活系の事業所を地域の皆さんに見ていただいて、利用されている方の話を聞いていただいたり、職員の様子を見ていただいたり、感想をお聞きしたい。埼玉県内で地域移行型ホームはここだけのようで、平成 23 年度には制度は終了している。その 3 月ギリギリに申請してそこから 14 年くらいたっているのですが、そもそもは精神科の病院の敷地に作って入院の方たちを退院させる趣旨のホームですが、有期限で必ず地域に出てもらう その通過型ホームで地域移行推進協議会も利用者を滞留させないためのものだと思います。制度も終わっているのので県や行政からの指導もあまり入らなくなってきており、自分たちでしっかり移行させていこうと取り組んでいます。

メンバーに利用者の方も入っているので利用している側の意見、保護者様からの意見、皆さんからのご意見を頂戴して生活の質を担保して、利用者さんたちの権利を守って支援していきたい。

地域移行型ホームぽてとハウスの見学の為 15 分程度会議を中断する。
見学終了後、会議を再開する。

理事長：地域での生活が長い方が、将来グループホームで生活したいという方も多くいるのだが、いきなり地域のグループホームとなると心配もあるので、ここがモニタリングの場所とした機能も兼ね備えていて、ご本人にあうグループホームがあれば、そちらに移行するという形をとっている。年々需要も高まっていて、日替わりで利用したい方を調整して、ここでの生活を体験していただいている。

K 様：室内の電気は、LED に変えないのか？

→ 理事長：普段支援していると気が付かないことも出てくるので、指摘されて気が付くこともある。対応していきたい。

理事長：現在の施設は昔の施設に比べるとゆとりがあるものの、4 人部屋では自由やプライバシーが確保できず、トラブルの原因ともなるため、時代の流れとして個室化を推進しており、30 部屋を確保する改築に着手している。

多くの日本の入所施設では、一度入るとそこで一生を終えるという終の棲家の流れになっている現状がある。中には 40 年 50 年入所したままというものもざらにあって、親御さんにしてみれば安心して死ねるというのは失礼な言い方ですが、任せられる場所があればその方が良いという親の想いが強い一方で、本人たちに見れば自分の意見も無視されて、そこで一生暮らさなくてはならないというのもそれは違うのではないかと思う。長年入所してきた方を見ていると目の輝きとかに陰りが見えてくるというか、あきらめに近くなっていく。それはおかしいと思って 当法人は 25 年以上前から、入所施設を一生住む場所ではなく、トレーニングをして街に出ていく場所として位置づけている。すぐに地域に出ていくのではなくて、施設からすぐに地域へ出るのが難しい利用者や家族、職員の心配を考慮し、トレーニングを行うスモールステップの場所として機能している。

副理事長：この施設は、地域に飛び出す一歩手前の練習の場であり、グループホームなので地域の人と同じように行政のサービス（ヘルパー利用など）を受けられる仕組みになっている。利用者に長く留まってほしくなく、スモールステップを踏んで最終的に地域にあるグループホームへ出て行ってほしいと考えている。

理事長：地域で体調を崩したり、人間関係がうまくいかなかったりした際に、一時的に戻ってきて再トレーニングできる訓練要素の強いグループホームでもある。

副理事長：ぽてとハウスは刺激が少ない環境であり、刺激に弱い人にとっては良い出発点となるが、必ずここから出ていってほしいという目標がある。でも人によっては2年以上になってしまう人もいる。出たり入ったりする人も何人もいる。

過去に利用した 66 人のうち、約 45 人が地域に出ており、現在は 5 人が入居、ショートステイの登録が 11 人いる。ショートステイは一泊二泊や平日・休日のみの利用者を組み合わせている。ショートステイ利用者が毎日入れ替わるため、利用者同士で鍛えられている側面もある。

地域移行型ホームはネットなどで批判的な意見もあるが、この法人では地域へのステップの場として非常に活用できている。

利用者の平均年齢は 52.2 歳で、平均区分は 4.2。生活支援のサービスを利用する方には成年後見制度を利用してもらうようお願いしている。

日々の記録は「ケアコラボ」を利用しており、記録するとすぐに家族も見られるようになっている。

グループホームは生活の場であり、日中は仕事に行く利用者がほとんどである。高齢の利用者、支援区分が高い利用者にとってはデイサービスの要素もある。

親なき後を考えるのは当然であり、親御さんへのサポートのためにも成年後見をしっかりとつける必要があると考えている。

5 意見・感想

M 様：成年後見人を付けていない人はいるのか？

→ 理事長：います。手続きを勧めるために新規利用されるときに説明をしている。

T 様：自分の娘が利用しており、施設内で非常に良い顔をしているのを見て、広々とした生活空間に満足している。一方で、職員が入れ替わったりする時に状態が落ちることがあるため、そのあたりが難しいと感じている。日々の利用状況をケアコラボに書いていただいているので安心できる。今後ともよろしくお願いします。

→ 副理事長：ケアコラボは記録を入力すれば親御さんもすぐみられる。スマホで共有できるアプリです。

K 様：毎日、どのような過ごし方をしているのか？

→ 副理事長：C 様は、日中は仕事に行っています。又さやかな日中活動も利用していますが、基本的には毎日仕事に行っています。

年齢が若く障害程度区分の低い人は仕事に行く意識が強く、高齢になるとデイサービスの感覚になってきます。

M 様:障害をもつ子供の親の立場としては、一番心配なのは親亡き後です。その時に障害のある子を見ていただいている清心会の皆さんには、もう感謝しかないですし、よく見ていただいているなと思う。障がい者への対応も、職員に対しての教育面など、本当によくやっていたいただいていると感じる。親が亡くなった後は、自分はもうわからなくなってしまうから、しかし、今対応していただいている姿そのものだと思う。自分自身もいろいろ障害や福祉の分野に関係させていただいて勉強しています。ただ、いろいろな障害をお持ちの方がいると思うので、職員の方たちはたいへんご苦労されていると思います。これから最終的には子供がグループホームでお世話になると思うが、自分の場合、親が子離れできなくて困っているのですが、どこかで受け止めなくてはならないと思っています。この会議で私たちが施設内を見せていただいて、意見を出して改善していただけるということですので、今日が初めてなので、今後いろいろと気が付いた点をお話させていただければと思います。

理事長:ご意見ありがとうございます。親御さんの想いとして、そのあともしっかりサポートできるようにしていくために、成年後見が必要だと考えています。当事者の味方になってくれる存在が必要です。地域に出ることは本人や家族にとってリスクとなるが、「失敗しても戻ってきていいんだよ」という確約を利用者と家族にしている。入所施設を卒業させることについて、ご家族は一生そこで暮らしてほしいと願うことが多いが、本人のことを考えチャレンジを応援しています。万が一失敗したとしても、必ずサポートし、路頭に迷わせることはありません。「今でないとグループホームの空きがないから」といった理由で、家族と離れるタイミングを早める必要はないと考えています。家族と愛する人たちと暮らす時間が少しでも長い方がよいという考えが基本にあります。ショートステイや一時的な分離を提案し、その結果家族関係が良くなったり、本人の自立が進んだりするケースもあります。

M 様:1 つ質問ですが、障害を持っているとどうしても年齢が 5 歳 10 歳上とみられることが多いですが、職員から見てもそう思いますか？

職員: 身体的な部分は、5 歳 10 歳高齢に見えるというよりは、突然ガクンと落ちる傾向があります。40 代、50 代に「壁」があるような印象で、そこを超えると一気に老化が進むことがあります。体調不良をうまく発せない方が多いので、突然悪くなったり動けなくなったりするケースが多いです。

副理事長:統計的に見て、50 代から 60 代(施設入所者の 7 割)で亡くなる方が多い。医療の進歩ですね。40 歳の壁と言っていましたが、40 歳はそうでもなく 50 歳の壁は感じます。

風邪一つで崩れます。健康管理は非常に大変であり、本人が健康に気を付ける意識があまりないので、看護師中心で対応していますが、ご家族が望めば病院ではなく施設で最期まで看取る看取り支援を行っています。

I 様: 地域移行型ホームが制度としてなくなってしまったというのはとても残念に思う。また、日中活動の就労継続 A 型、B 型があるが、A 型から B 型に変わると業務の内容が結構影響がある。スモールステップが大事だと感じる。ぽてとハウスの存在意義が大きいと思った。

理事長: 法人は法的な制度が終了しても取り組みを続けていて、熊木町にあるサポートセンターのように、定住せずに地域でのスモールステップとして利用される場所も設定している。グループホームに所属しながらアパートで暮らす 2 年間のサテライト型グループホームも増えており、法人が一時的に契約者となり、うまくいけば本人に契約者を変えてそのまま暮らせる形をとっている。法人の特徴として、食事はセントラルキッチンから配食し、利用者支援に特化できるようにしているため、料理ができない男性でも食事の準備が可能である。

利用者 C 様の意見

理事長: ぽてとハウスの暮らしはどうですか？慣れましたか？

利用者 C 様: 大丈夫、慣れた。

理事長: 坂をあがってくるのは大変ではないですか？

C 様: 上がってくるのは大丈夫。

理事長: 困っていることはない？

C 様: ない、良い感じです。

理事長: C さんは長年地域で生活されており、お祭りも大好きです。日中は寄居方面で仕事をしている。毎日電車に乗り、帰りは坂道を自転車を押して帰宅しています。もともと市内に住んでいた人なので、ちょっとサポートが必要ですけど、お祭りは町中に帰る感じです。

6 今後の地域連携推進会議について

- ・参加者全員に意見や感想をいただき、無事会議が終了したことのお礼を述べ、貴重なご意見を今後の運営に役立てたいと述べた。
- ・次回の会議は次年度になるとし、引き続きの協力を依頼した。
- ・議事録については、個人が特定されない形でまとめ、後日ホームページで情報公開することを伝えた。

7 閉会 18:00